審査の結果の要旨

氏名　丸山　慎

本論文は音楽表現を成立させている要因の探究を目的として、管弦楽指揮者の身体運動を分析した。身体運動から音楽表現に迫る研究は稀である。一章では、指揮者の運動から音楽にアプローチする意義と根拠が議論されている。まず指揮法の歴史を概観し、拍子を問題にした近代指揮法に対して、古くから指揮者が独自の全身運動を指揮技法として開拓していた事例が示された。さらに空気中の事物間の衝突から伝播する振動の構造に聴覚的な意味の単位を求める「生態学的音響学」から、オーケストラ演奏と指揮者運動が一体になって「音楽的事象」の成立を制御しているとする観点を導入した。

つづく二章では、指揮者井上道義（モーツァルト交響曲２５番第一楽章）の指揮と、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターのボーイングの楽曲開始までの準備時間や開始点を計測し、初日に至るリハーサルにおいて両者の時間差が減少することを示した。また指揮１６種の身振りの意味を異なるパート５名の楽団に問うたところ、その受け取り方は各自で異なり、指揮者の身振りは「多義性」を持つことが指摘された。さらに三章では測定方法を洗練させ、指揮者沼尻竜典とトウキョウ・モーツァルト・プレイヤーズによるレコーディング（ベートーベン交響曲５番第一楽章）に至るリハーサル１２回と本番１１回を高速撮影し、楽曲開始をつげる指揮者のストローク運動が、持続時間では毎回ほぼ同じであるが、本番では運動方向を変化（垂直から水平へ）させたこと、コンサートマスターと指揮者の開始点の時間差はほぼ一貫していたが、本番ではそれが拡大したことを示した。指揮運動の形態的特徴と演奏開始の運動制御に関連のあることが示唆された。

四章ではインディアナ大学音楽学部指揮とヴァイオリン専攻院生各１名をペアとし、２ペア４名の被験者に、同一の拍子構造で、似たテンポで演奏できる２曲、ブラームス交響曲第一番とチャイコフスキー弦楽セレナーデの演奏を求め、指揮者の右手の運動の特徴（形態、振幅、速度、加速度）を測定した。各指揮者の楽曲開始前後の運動は、二つの楽曲で異なる特定のパターンを示し、指揮にみられる運動協調が楽曲のアイディアを一貫して表現している可能性を示唆した。最後の５章では「生態学的音響学」を基礎に指揮者身体の運動協調が、演奏表現の成立を制御している可能性が議論された。

以上の内容を持つ本論文は、フィールド観察や統制された実験で、音楽の場に埋め込まれた指揮運動の解析から、演奏家に共有されている「音楽的意味」の一端に迫ろうとしたものである。方法も結果も試行的であるが、本論文が、今後この未開拓の領域が取り組むべき幾つかの問題を発見したことは確かである。この点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達していると認められる。